

Title	筑前國嘉穂郡王塚裝飾古墳(京都帝國大學文學部考古學研究報告 第十五冊)(梅原末治 小林行雄)
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1940
Jtitle	史学 Vol.19, No.2 (1940. 9) ,p.174(376)- 175(377)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19400900-0175

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

殆んどないが、貝塚上に營まれた特殊な奈良時代墳墓の一例として注目されねばならない。

終りに臨み伊東氏を始め關係各位の眞摯なる努力に滿腔の敬意を表すると共に同調査部の一層の發展を祈りつゝ拙い紹介の筆を擱くこととする。(清水潤三)

改訂 増補 世界地理概説

(有賀春雄 著 慶應義塾出版局)

目前の世界が、歴史的に一大轉機に際會する時、その世界各國の様々の姿を、最も正しく認識するため、吾人は常に世界の現狀を解説する良き参考書を、求めてやまぬ。國民の多くが、多事多忙である折柄、その解説書も、おのづから簡明なものが一層望ましい。

續々刊行される類書中、必ずしも良書のみではないが、有賀春雄氏が、今回世に出された『改訂増補世界地理概説』は、比較的簡易に、世界の趨勢を吾人に會得させる。昭和十一年に、『ヨーロッパ地誌』を著述された同氏は、その後、教課用として『世界地理概説』を編述されて居たが、今回同書に増訂を加へて發行されたのが、本書である。

青年學徒にはもとより、一般世人にも、世界の現狀を、地理的觀念のもとに、認識させる良き参考書として、世に推薦する。

本書に、挿入地圖の多いことは、著者自らも言はるゝ如く、慥に本書の特徴と言へよう。ただ、その據られた、原書名を附記されたならば、の念が無いでもない。本書の内容は、本文三百頁。

『はしがき』にも言はれた様に、自然地域に基づく、配列法にはよらず、政治地域、或ひは、經濟地域を基礎として、綜合的に記述されて居る。第一章 地理學概論、第二章 地理的世界の展開、第三章 アメリカ合衆國、第四章 中米及び南米諸國、第五章 大英帝國、第六章 フランス、第七章 ドイツ、第八章 英、佛、獨、緩衝諸國、第九章 イタリア、第十章 イベリア及びバルカン諸國、第十一章 スカンディナヴィア及びバルト海沿岸諸國、第十二章 ソヴェエト聯邦、第十三章 南西アジア諸國、第十四章 東アジア諸國、結語。最初の二章に於いて、一般的な地理學の知識を、吾人に會得せしめようとする著者の周到な注意には、敬意を表し度い。要するに、あらゆる角度より、世界の現狀を凝視せねばならぬ吾人は、本書によつて、地理的世界の種々相を、理解出来ることを、心から喜ぶものである。終りに、著者の健在を祈る。定價二圓五十錢。(犬塚久雄)

筑前國嘉穗郡王塚裝飾古墳

(京都帝國大學文學部考古學 研究報告 第十五册)

(梅原末雄 著)

此教室の研究報告の第一册及び第三册は九州の裝飾古墳の研究であつた。今や教室主任の交代して先づ第一に表はれた報告書が同じ主題であるのも奇縁である。遠賀川の上流穂波川の流域、桂川村に存する前方後圓の大古墳が昭和九年土工の爲石室を露出

し、美麗な壁畫が發見され、同年故濱田教授は梅原氏を滯同して之を檢分し、次いで昭和十年と十三年に汎り、兩度の調査がなされ、本書の公刊を見ることとなつた。古墳は現在後圓基底の徑約百七十尺、その高さ約三十尺あり、前後の軸は現在最長二百二十尺餘に上り、三段に築造せられ、空渾を繞らし、外部的な裝飾として葺石及び埴輪圓筒を有してをる。横穴式石室はその後圓部にあり、主室内に棺床や、之を被覆する特殊な石屋形の架構あり、棺床の上には二人を伸展葬する設備あり、また石枕二個が室内に置かれてゐた。本石室をして顯著ならしめたのは主室四壁と前室の正面に華麗なる繪畫が描いてあることであり、馬、靱、楯、刀、弓、双脚輪狀文、蕨形、三角形、珠文が赤、綠、黒、黃の四色で彩られ、遺物としては土器、玉類、裝身具、鏡、武器、馬具等が發見せられてをる。本古墳は、石神山、岩戸山古墳と聯關あり、此二古墳の何れかが繼體天皇の朝に北九州に反した磐井と結びつけられる所から本古墳の年代もそれに近い頃に比定することが出来る。著者はかう結論して最後に壁畫の意味を考核し、その靱、楯の類は奥城に於て外から來るものをプロテクトするものではないかと推し、双脚輪狀文に就ては之をマジカルの意味に解したいがなほ疑ひを存するとして解決を將來に期してをる。

本報告書の價値は原色版により、室内の壁畫を明瞭に傳へた點にあり、此點學界の感謝に價する。一體九州裝飾古墳の文様の色調と云ひ様式と云ひ極めて特異のものあり、之を北方大陸の類似古墳のそれによつて説明し去ることは不可能である。もしその比較を他に求むれば太平洋の土俗的資料に近似が見出だし得やう。

その三角や厥形、珠文の類も之を塙の小口に印した文様と比較する外に、他山の石としてもつと廣範圍な土俗資料の中に類似例が求めらるべきである。古代日本の文化には太平洋的文化の匂が多分に含まれてをり、一應かゝる系統の究明が行はれて後九州古墳裝飾文様の解釋に或種の光明が投ぜられるのではないかと思ふ。
(松本信廣)

人文地理學原理 上卷

フラーシユ著、飯塚浩二譯
岩波文庫版

近世フランスに於ける人文地理學の開祖ヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシユの代表的著作なる『人文地理學原理』は、我が國にも既に前から紹介されてゐるが、今回こゝに完譯の上梓を見たことは地理學並びに史學に従事する者にとつて大なる喜びとする所である。

原著者は一九一八年に歿し、本書は遺稿として未完のまゝ殘されたものを、高弟マルトンヌにより編纂せられ、一九二二年にパリのアルマン・コーラン書店から發行されたものであり、編纂上の勞苦並びに本書の價値に就いてはマルトンヌの序言に明かにせられてゐる。いふまでもなく著者は十九世紀に至つてドイツに成立した近世人文地理學の學説を繼承しつゝ、更に歴史の見地の重要性を力説することにより、ドイツ地理學派の陥らんとした決定論より人文地理學を救ひ、これに新たな意義を賦與するに至つたのであり、本書は著者の圓熟せる見解を縦横に述べたものであ